

成果報告書

2026年 4月 15日

公益財団法人 乃村文化財団 理事長 様

貴財団の助成金事業についてご報告します。

助成区分	教育普及活動助成	
研究および教育普及活動の期間	2025年 4月 ～ 2026年 3月	
フリガナ	ヒョウゴケンリツヒトトシゼンノハクブツカン	
大学（研究室等）名 学会・博物館名	兵庫県立人と自然の博物館	
フリガナ	ムラカミ ノリアキ	職名
代表者名	村上 哲明	館長
フリガナ	フクモト ユウ	職名
担当者名	福本 優	研究員
所在地	兵庫県三田市弥生が丘6丁目	
対象となる研究および教育普及活動の概要	【テーマ(主題)】	オトを楽しむ博物館『そとはく』におけるポップアップ展示空間によるセミナーの実施
	【趣旨・目的】	博物館の展示空間やセミナー・実験室という特別な空間を飛び出して、来館者の身近にある自然の中の“不思議”に対して探求する機会の創出を目指す。本事業の目的は、日常なる身近な自然の中に実験室を持ち込み、自然の持つ“不思議”に出会い、“なんだろう？”という探求心を想起させるような実験・セミナープログラムを実施することである。
	【実施体制】	当館に所属する多分野の研究員のチームをベースに、青空実験室の展示空間デザインのために博物館との連携の経験を持つデザイナーが参画したチームにより構成した。 また、デザイナーには展示空間を作るための屋台の製作チームの統括も依頼し、建築家・大工により構成するチームを組んで取り組んだ。
	【実施方法】	セミナー実施の展示空間は、実験器具や大型モニター、電源を搭載した屋台を製作した。製作した屋台を博物館周辺の公園園地、アウトリーチ先の公園において展開し、ポップアップでの展示、セミナー空間をつくった。プログラムは、地質、昆虫、植物などの当館研究員の専門性に合わせ、観察に加え、性質調査等を実施する。今年度は天候等の影響により全分野での屋外での実施は実現できなかったが、今後も継続的に屋台を用いての実践を予定している。
	【成果と社会的効果】	屋台により、展示空間を創出することで、通りすがりの無関心層が注目し、立ち寄ってくれた。また、小さな子ども達に「めっけもん博物館」と題して、身近な自然を集めて分類するネイチャービンゴを提供することで、より主体的に参加し、身近な自然を自ら進んで探索する様子が見られた。 こうした活動の継続、また、平日の実施などを追加していくことで、休日の来館者のみならず、周辺地域の博物館無関心層の子どもへの波及と自然科学へのリテラシー及び非認知能力の向上への効果が期待できる。
共同研究者等の有無	なし・あり（人数 5 名） 黒田有寿茂（兵庫県立大学准教授・兵庫県立人と自然の博物館主任研究員） 山田量崇（兵庫県立大学准教授・兵庫県立人と自然の博物館主任研究員） 田中公教（兵庫県立大学准教授・兵庫県立人と自然の博物館主任研究員） 生野賢司（兵庫県立人と自然の博物館研究員） 坂本貴海（兵庫県立人と自然の博物館研究員）	
助成金額	100 万円	主な用途 屋外におけるポップアップ実験セミナー空間のための屋台とその備品

研究室名 学会・博物館名	兵庫県立人と自然の博物館
テーマ(主題)	オトを楽しむ博物館『そとはく』におけるポップアップ展示空間によるセミナーの実施
【趣旨・目的】	
【背景】ライトユーザーが一步踏み込みたくなる、探求心を育む必要性	
【目的】身近な空間にある自然を題材とした実験やセミナーを通じた探求心萌芽の機会創出	
<p>自然史博物館には、地域の自然環境にまつわる様々な標本・資料が収蔵されており、これらを活用して多様な展示による普及啓発活動を推進している。一方で、これらの展示に出会う場面は、博物館内の特別な空間内であることがほとんどであり、結果的に自然科学が好きなユーザーに偏ってしまいがちである。</p> <p>本事業の目的は、日常にある身近な自然の中に実験室を持ち込み、自然の持つ“不思議”に出会い、市民の意識の中に“なんでだろう？”という探求心を萌芽させる機会となる実験・セミナープログラムを実施することである。</p> <p>博物館の展示空間やセミナー・実験室という特別な空間を飛び出して、普段生活している空間をポップアップでの実験・セミナー空間に転換し、プログラムを実施することで、日常的に暮らす公園や広場にも、未知なる不思議が詰まっていることを実感できる体験を提供する。</p>	
【実施体制】	
<p>実験・セミナープログラムの実施体制</p> <p>実験・セミナープログラムの実施は、当館の多様な研究分野からのチームを編成し行った。具体的には、福本優研究員（申請者代表／専門：都市計画学）、黒田有寿茂主任研究員（専門：植物生態学）、山田量崇主任研究員（専門：昆虫学）、田中公教主任研究員（専門：古脊椎動物学）、頼末武史主任研究員（専門：海洋生態学）、生野賢司研究員（専門：古生物学、地質学）、坂本貴海研究員（専門：昆虫学）による実践チームとし、植物・昆虫・化石（古生物）・岩石等の一般的な自然科学分野の研究者だけでなく、都市づくり・まちづくり分野の研究者が参画することにより、公園や広場などの都市の多様な公共空間をフィールドとして、自然科学をテーマにした実験・セミナープログラムを展開する。各回のセミナーでは、それぞれの専門分野を活かし、採集した昆虫や植物、石、土等の観察や性質の検定などの実験を行った。</p> <p>屋台デザインについては、研究員・デザイナー・建築家・大工の混成チームにより、デザインから製作まで実施した。</p>	
【実施方法】	
<p>セミナー実施の展示空間は、実験器具や大型モニター、電源を搭載した屋台を製作した。製作した屋台を博物館周辺の公園園地、アウトリーチ先の公園において展開し、ポップアップでの展示、セミナー空間をつくった。周辺の自然を体験できるように屋台が利用できた際には、スズメバチの生態展示やマイクロスコープを用い、周辺の自然物や虫を拡大してみる等の実践を行った。</p> <p>「ナンデナン？」プログラムは、地質、昆虫、植物などの当館研究員の専門性に合わせ、観察だけでなく昆虫採集などの体験型のプログラムを通じ、生息する場所の特性や生息環境による生物相の違い、植物による昆虫の誘引等、自然のつながりに関する知を提供した。</p> <p>。今年度は天候等の影響により全分野での屋外での実施は実現できなかったが、今後も継続的に屋台を用いての実践を予定している。</p>	

研究室名 学会・博物館名	兵庫県立人と自然の博物館
テーマ(主題)	オトを楽しむ博物館『そとはく』におけるポップアップ展示空間によるセミナーの実施

【研究・教育普及活動の成果】

◇探求型のセミナー群によるオトの価値の体感

従来からのオープンセミナーでの発信するメッセージをより探求的なものにし、実施することで従来とは異なる子ども達の気づきの提供と日常との接続を創出することができた。具体的には、「身近なところで虫さがし〜こんなところに虫がいるの、ナンデナン?」と、題した虫捕りオープンセミナーでは、博物館周辺の多様な環境を活かし、2か所での虫探しセミナーを実施した。単なる虫捕りではなく、その背景にある生息環境やその違いによる変化への気づき、また、身近な環境への体験に応用する感覚を得ることができた。



上) エントランスホール前の芝生広場におけるポップアップの展示空間でのプレセミナーの様子。研究員を中心に多くの参加者が参加し、趣旨説明中。
下左) 芝生広場での虫捕りの様子。バッタ等の見つけやすい生き物だけでなく、小さな生き物も集中して探す。多くの保護者も一緒になって虫探しに参加していた。

下右) 建物の反対側の植栽帯での虫捕りの様子。芝生とは異なる種の虫が生息していることへの気づきを得た。



◇屋台作成による「ナンデナン?」の屋外での実践

上記のナンデナンのプレ開催の様子も踏まえ、作成した屋台によりポップアップの展示空間で、オープンセミナーを実施した。捕まえた虫を拡大してみたり、普段は気に留めないコケ類の拡大したようすをみんなで観察することで、新たな気づきを自分だけでなく、他者とも共有することができ、より身近な日常の不思議を身近なものとしての学びとして体感してもらうことができた。



左) 屋台の左右で二人の研究員が虫の話とコケの話解説している様子。子ども達が抱く興味関心に合わせて、対応することで、より楽しい体験としての思い出作りにつなげる。

右) コケをマイクロスコープで拡大しながらみんなで観察している様子。普段は気にも留めない、コケ類を複数採取し、観察した。形の違いや色を実物と見比べ、友達と会話しながら観察することで、より興味を持って実物に触れてくれた。

研究室名 学会・博物館名	兵庫県立人と自然の博物館
テーマ(主題)	オトを楽しむ博物館『そとはく』におけるポップアップ展示空間によるセミナーの実施

【今後の成果の活用と活動の展開について】

◇平日放課後時間でのサイエンスカフェの実施

今回の屋外セミナーの知見を活かし、平日の放課後時間において、サイエンスカフェとして近隣子ども達がより、日常的に気軽に訪れられるセミナーとして実施し、休日の親子連れだけでなく新たな層への遡及を目指す。

これは、単に社会教育施設としての従来までの枠組みを超え、より日常の中で自然科学への本質的な学びの意欲につなげることで、特に公立博物館として求められる地域課題解決に寄与する展開となると考えている。学校教育の現場では、フォローしきれない様々な特性を持つ子どもに対しても「興味を探究し続けても良い場」として機能し、その活躍を子ども達が見ることで、特性を持つ子への理解が深まり、より社会的包摂性の高い学習の場づくりを提供できる可能性を有している。

今年度も試験的に地域の放課後学習の場に参画し、その可能性について検証したが、今後は当館が主体的かつ安定的に事業として展開するための方策を検討する。



◇アウトリーチ活動における身近な自然の活用

従来のアウトリーチ活動の多くは、当館が所有する資料をベースにした「伝える展示」に留まっていた。しかし、今回作成した屋台をアウトリーチ事業においても持参することで、当館の周りで実施した虫探しとその後の観察を一つのパッケージとしたアウトリーチ事業が、実施先の環境に関わらず実現できる。屋台にはポータブルバッテリー、マイク・スピーカーも搭載しており、屋外の公園等のフィールドの中でもより多様な学びを實踐できるアウトリーチ活動へと展開できると感ている。今年度は、電子機器を登載しない状態で試験的にアウトリーチ活動に持ち出して使用し、その効果を確認できたことから、次年度以降はフルスペックの屋台でアウトリーチ活動を展開することで、より多様で効果的なポップアップ展示空間を活用したアウトリーチ事業へと展開することを検討している。



左) 公園でのアウトリーチ事業の一つとして屋台を試験的に運用

右) 屋台に子どもが集まるので、虫捕りを実施。捕まえた虫を研究員がその場で同定して展示した。